

実践報告：元寇防塁研究と九州大学『ギャラリー トークー発掘担当者とみる元寇防塁展一』

吉田，明世
九州大学総合研究博物館

福永，将大
九州大学総合研究博物館

米元，史織
九州大学総合研究博物館

<https://doi.org/10.15017/7171724>

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告．21，pp.131-144，2024-03-31．The Kyushu University Museum

バージョン：

権利関係：



実践報告：元寇防塁研究と九州大学 『ギャラリートーク——発掘担当者とみる元寇防塁展——』

吉田 明世*・福永 将大・米元 史織

九州大学総合研究博物館：〒819-0395 福岡市西区元岡744 フジイギャラリー
*yoshida.akiyo.032@m.kyushu-u.ac.jp

要旨：九州大学総合研究博物館2023年度春季企画展示として、「元寇防塁研究と九州大学」が開催された。福岡ミュージアムウィークに参加しており、開催中の展示を利用して、『ギャラリートーク——発掘担当者とみる元寇防塁展——』を企画した。本イベントでは、身近にある元寇防塁について知ってもらうことを目的とし、参加者と展示を鑑賞して周りながら、展示物の解説や質疑応答を行なった。本報では、ギャラリートークの概要と、実施した中で明らかとなった点について報告する。

キーワード：ギャラリートーク、元寇防塁、フジイギャラリー、九州大学総合研究博物館

1. はじめに

九州大学伊都キャンパスに所在するフジイギャラリーは2022年5月にグランドオープンした。人々の集いや表現の場である椎木講堂と、書籍による知の集積・探究の場である中央図書館の中間に位置し、両者のあいだに新しい流れをうみだし、本学が目指す総合知を共創し表現できる場となることを目指している。キャンパスの“第三の居場所”としてはもちろんのこと、実践研究への利用場所、研究を「みえる化」するための共同企画実施など、挑戦的な使い方を想定している施設である。

2023年4月3日から6月30日まで、フジイギャラリーにて、九州大学総合研究博物館2023年度春季企画展示「元寇防塁研究と九州大学」を開催した。本展示は、九州大学で行われてきた元寇防塁の調査研究、その中でも特に考古学分野における調査研究の歴史と最新の成果について紹介するものである。

フジイギャラリーのグランドオープン時は新型コロナウイルス感染症の感染拡大時期にあり、当ギャラリーも学内者限定の入館など入場者を制限していたことから、イベント等による広報活動を十分に行うことができなかった。2023年は新型コロナウイルス感染症に伴う行動制限

などが緩和されたため、福岡ミュージアムウィーク¹に合わせて、イベントを通して九州大学の考古学分野の研究成果をアウトリーチするとともに、フジイギャラリーの周知を行うことを目的として、「ギャラリートーク——発掘担当者とみる元寇防塁展——」を開催した。このワークショップは対話型鑑賞法を参考にし、小笠原など(2012)が推奨するような、展示内容だけでなく学芸員や発掘者、研究者の仕事を知ってもらうことを目指して行った。

黒沢(2015)は、「わずかな文字による説明板を展示



図1. フジイギャラリー立地図

物の脇に配置するという解説手法は、現在の博物館展示の基本的なスタイルとなっていますが、それが説明として十分でないことは自明」と述べている。従って、パネル解説のほかにギャラリートークを実施することは、来場者の展示内容への理解を促進し学びへの意欲の向上へつなげることができると期待される。本ギャラリートークでは、展示制作担当者が発掘当時の裏話などを交えながら展示を解説することで、来場者が身近にある元寇防塁についての理解をより深め、かつパネル文字だけでは伝えられない発掘現場の臨場感を伝えることができるイベントとなるよう工夫した。

2. 実施概要

【企画名】ギャラリートーク——発掘担当者とみる元寇防塁展——

【日時】2023年5月13日（土）、20日（土）

各日①13時00分～14時00分、②15時00分～16時00分

【会場】フジギャラリー

【対象】不問

【定員】各回15人（事前申込制、先着順）

【参加費】無料

【参加人数】

5月13日（土）①11名（10・20代1名、30代1名、40代1名、50代4名、60代2名、70代以上2名）②10名（10・20代1名、40代3名、50代2名、60代3名、70代以上1名）

5月20日（土）①5名（10・20代1名、40代3名、70

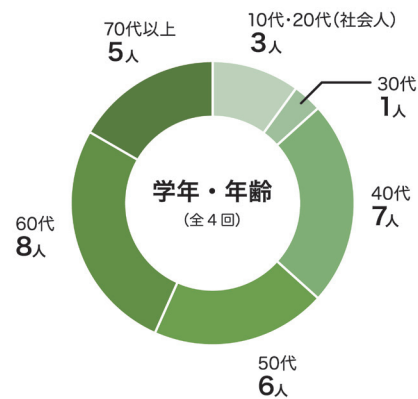


図2. 全参加者の年代



図3. 展示チラシ

代以上1名) ②4名(60代3名, 70代以上1名)

【実施案検討】吉田明世, 米元史織, 福永将大

【実施体制】解説者: 福永, 司会: 吉田

【タイムスケジュール】

- 13:00/15:00 フジイギャラリー ギャラリー1集合
13:05/15:05 司会者・解説者の自己紹介, フジイギャラリーの紹介, アンケートの説明, 諸注意
13:10/15:10 ギャラリー2に移動, 解説スタート
13:50/15:50 質疑応答, 締めくくり, アンケート回収
14:00/16:00 終了

3. ギャラリートークを実施した展示の詳細

ギャラリートークの状況の説明に先立ちます, 今回のギャラリートークの対象である「元寇防塁研究と九州大学」について説明する. この展示は, フジイギャラリーに2つあるギャラリー空間のうち, 高天井で閉鎖された展示空間であるギャラリー2を用いており, 大きく5つの章に分けられていた(図4). 第1章・第2章はモンゴル襲来と元寇防塁の概要と研究史, 第3章から第5章は

九州大学で行われてきた研究について, いずれも時系列で紹介されていた. 来館者は章を追うごとに最新の研究へと近づく動線となっており, 九州大学で行われてきた元寇防塁研究を時系列に沿って一挙にまとめた展示は, 今までにないものとなっていた.

3-1. 第1章 モンゴル襲来

入室してすぐに目に付く場所に蒙古兜(図4の①)が3刎置かれており, 兜の内部も鑑賞できるよう支柱を高くして展示されていた. その奥に続く中央エリアには, 展示の目玉である蒙古襲来絵詞(九州大学附属図書館所蔵)が2巻, 左右2列で置かれていた.

会期前半(4月3日~5月12日)と後半(5月15日~6月30日)で絵詞の公開部分が資料保護の為に展示替えされており, 右手側(図4の②-1)は有名な場面である「鳥飼において奮戦する竹崎季長を描いた場面」から「文永の役において箱崎から博多へ移動する竹崎季長を描いた場面」へ, 左手側(図4の②-2)は「竹崎季長が志賀島へ向けて生の松原を出発する場面」から「弘安の役における博多湾でのモンゴル軍との海戦を描いた場面」へと変更が行われた.

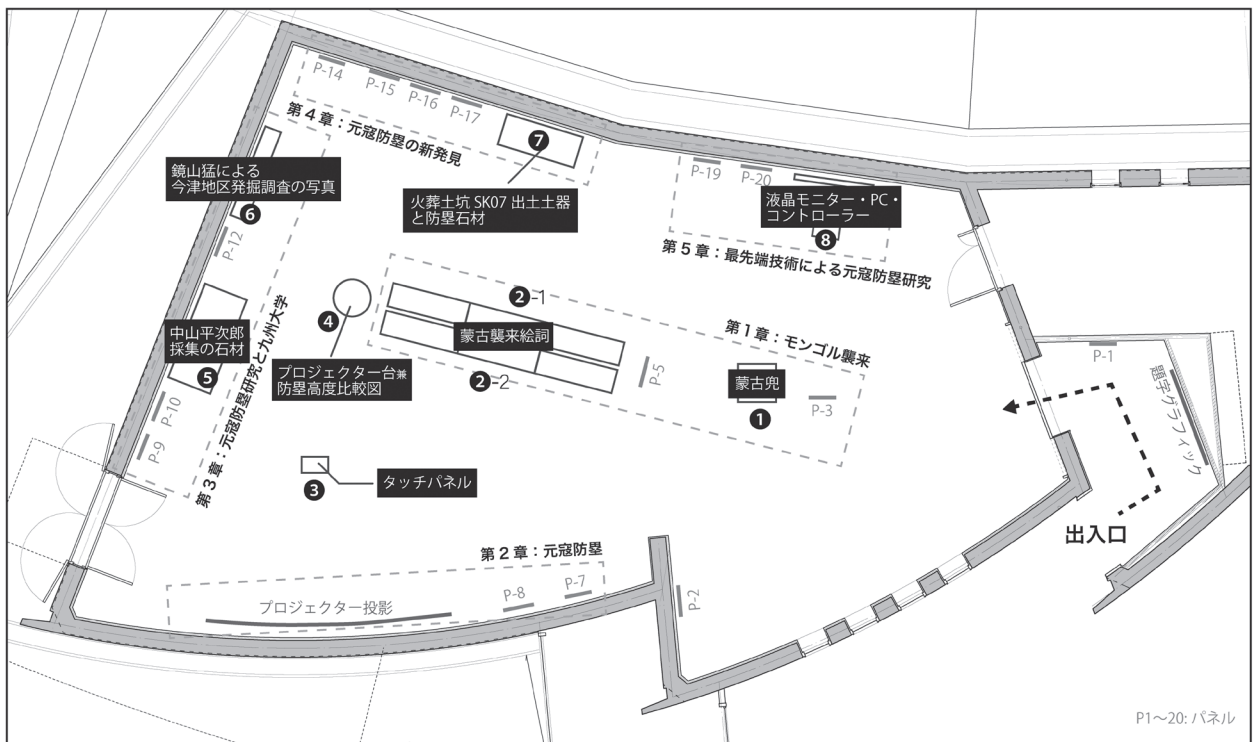


図4. ギャラリー2での展示配置図

3-2. 第2章 元寇防塁

第2章ではプロジェクター（図4の③）で映像を壁面に投影しており、複数コンテンツを盛り込むことが可能となっていた。投影されるコンテンツは、博多湾沿岸の防塁をまとめた地図と各地区の防塁の紹介と、第1章で展示されていた蒙古兜を360度から見ることのできる3Dデータで、タッチパネルによって来場者が選択できるようになっていた。特に3Dデータはタッチパネルでの拡大・縮小・回転が可能で、実物では確認できない細部や裏側まで見ることができ、①の実物に戻ってデータで見た部分を再度見直せるようになっていた。

プロジェクターの設置台として利用している円柱には、今津地区と箱崎地区の防塁の防塁構造比較図が掲示され、それぞれ実物の高さを比較しつつ最大残存高を体感できるようになっていた（図4の④）。

3-3. 第3章 元寇防塁研究と九州大学

第3章は、元寇防塁研究の先駆者である中山平次郎（1871-1956）と、初めて元寇防塁を学術発掘調査した鏡山猛（1908-1984）の紹介をもとに、九州大学が元寇防塁研究に深く関わってきたこと（福永2022a）が示されていた。中山平次郎が採集した石材資料（図4の⑤）には、それぞれ採集地が墨書きされていた。鏡山猛の紹介では、発掘調査時の貴重な写真（図4の⑥）による採集地の地形や石積みを確認することができた。この写真は今回初出されたものであり、当時を振り返る重要な資料となった。このコーナーでは歴史的木製什器を展示棚として使用しており、そのようなしつらえが、元寇防塁研究の歴史ある雰囲気醸し出していた。

3-4. 第4章 元寇防塁の新発見

第4章では、九州大学埋蔵文化財調査室による2016年以降の調査（福永2022b）において新たに箱崎キャンパスで見つかった防塁遺構にフォーカスし、その他の博多湾沿岸で発見された防塁と比較することで判明した研究成果について紹介していた。展示の後半へと移る部分であったため、パネルには図解を多く用いる工夫がされていた。理学部二号館前南地点第3次調査で見つかった土器と防塁石材（図4の⑦）が展示され、土師器の鍋の口を下にして伏せた状態で配置することにより、発掘時の様子が再現されていた。

3-5. 第5章 最先端技術による元寇防塁研究

第5章では、最先端技術を用いた高精細の3D測量調査成果が紹介されていた。「Unreal Engine」というソフトウェアを使用し、デジタル再現した箱崎キャンパス跡地を歩き回れるゲームコンテンツがあった（図4の⑧）。コントローラーを用いることにより、ゲーム内を歩き回るキャラクターを移動やジャンプ、視点移動させることが可能で、またキャラクターが身長160cm、人並み程度のジャンプ力という設定により、箱崎キャンパス跡地の元寇防塁の石積みの大きさや高さなどを、疑似的・体感的に体験できるようになっていた。

この第5章の展示については、九州大学大学院人間環境学研究院の堀賀貴先生と小川拓郎先生にご協力いただいたものだった。

4. ギャラリートーク実施内容

本項では4回実施したうちの1回（5月13日①回）を事例として、記述や写真の記録などをもとに時系列で示す。参加者の様子は、枠で囲んで記す。

4-1. 導入（図5a）

最初にフジイギャラリーの施設紹介をするため、参加者にはギャラリー1に集合してもらった。歴史的什器を使用した館内や、見晴らしの良いガラス窓から見える伊都キャンパスの風景をご覧いただき、フジイギャラリーの施設概要を簡単に紹介した。その後、アンケートの説明、手荷物預かりの案内の後、ギャラリー2の出入口前に移動した。

解説担当の福永が、本ギャラリートークでは固く構え過ぎる必要がないこと、気になったことは随時質問して良いことなどを伝え、展示室内へと移動した。

4-2. モンゴル襲来の総論

展示室入り口から会場全体が見渡せるスペースに移動し、まずモンゴル襲来について説明を行った。文永の役と弘安の役の二度にわたる侵攻を受けたことや、モンゴル軍の動きについて説明した。

特に、学校の授業では「蒙古襲来」という名称で教わった人も多いと思われたが、近年では「蒙古」には蔑視的

な意味合いが含まれる認識もあるため、今回の展示では「モンゴル襲来」という言葉で解説することを伝えた。

4-3. 蒙古兜（図5b）

次に蒙古兜が展示してある円柱型の展示ケース（図4の①）の周りに移動した。ここでは蒙古兜発見時の放射性炭素年代測定について解説した。測定には兜の内側にある木材が用いられていることから、実際に兜の内側を覗き込んでもらうよう誘導した。

測定結果によると、展示されていた兜は江戸時代に製作されたものである可能性が高く、工芸品として作られたと考察されている。ただし、昔の材料を使用することで誤差は生まれることから、年代測定だけでは製作時期について断言できず、類例の収集・検討するなどして研究を深化させる必要がある。まだ解明されていない歴史の面白さがあり、参加者も興味を持っている様子だった。

4-4. 蒙古襲来絵詞（図5c）

次に蒙古襲来絵詞が展示してあるエリア（図4の②）に移動し、描かれている人物や場面を説明したのち、参加者には自由に観覧いただいた。

文永の役において、てつはうが炸裂し、矢が飛び交うなかモンゴル兵に応戦する竹崎季長の様子が絵と詞書によって記録された著名な資料である。教科書でもよく目にすることから時間をかけて鑑賞する人が多く見られた。

4-5. 博多湾沿岸の元寇防塁（図5d）

壁面にプロジェクションされている博多湾沿岸の地図（図4の③）をもとに、今津・今宿・生の松原など8つの地区に防塁が築かれていることを説明した。

博多を攻めた理由について、当時の博多は国際貿易都市であり、そこに出入りする商人から情報を得ていたため、ピンポイントに博多湾に攻め入ったのではないかという、福永による考察があった。

4-6. 元寇防塁研究と九州大学

ここまでの解説でおおよそ元寇防塁についての理解を深めてもらったところで、中山平次郎と鏡山猛の紹介をもとに、九州大学が行なってきた元寇防塁研究の歴史解説へと移行した。

福岡医科大学（現在の九州大学医学部）の病理学教授であった中山平次郎は博多湾沿岸の防塁残存箇所を徹底的に踏査した研究者である。今回の展示では、調査時に中山が収集した各地の防塁の石材13点が展示されており（図4の⑤）、使用された石材の大きさや形状が各地区で異なることが実物で確認できるため、それを元に説明した。

「元寇防塁」という言葉を名付けたのが中山平次郎であるという事実を初めて知る人が多くいた。

また、初の学術発掘調査団を務めた鏡山猛の調査（図4の⑥）には、考古学だけでなく、現在の九州大学の「総合知」にも通ずるような研究方法が見られることを説明した。

各学部を横断した学際的な調査研究組織を結成し、調査にあたったという部分に多くの参加者が感心している様子だった。

4-7. 元寇防塁の新発見（図5e）

会場内（図4の⑦）で、箱崎キャンパスでの元寇防塁調査について説明したのち、元寇防塁の廃絶について詳しく解説した。

元寇防塁のその後について考えたことがある人は少なく、石材不足により防塁の石を砕いて再利用していたという事実を初めて知る人が多くいた。会場に、理学部二号館前南地点第3次調査で火葬土坑から見つかった土器と防塁石材が展示されており、発掘された証拠に基づき明らかになる元寇防塁の廃絶について、参加者の注目を集めていた。

4-8. 最先端技術による元寇防塁研究（図5f）

最後の章（図4の⑧）では、最新の研究結果を紹介した。レーザー・スキャンニングを用いた三次元測定の解説や、そのデータを使用したデジタルコンテンツが体験

できることを説明した。

地中深くに埋め戻された元寇防塁を見ることは容易ではないが、最先端技術を用いてデジタル上に再現することで、元寇防塁の石積みの大きさや高さを擬似的に体験でき、さらにゲーム感覚のような気軽に楽しめる仕様ということもあって、多くの方に好評であった。

4-9. 締めくくり

今回の展示では九州大学が古くから元寇防塁研究に関わってきたこと、そして今なお研究は進められており、考古分野における調査研究は続いているという言葉で本ギャラリートークを締め括った。

終了後もほとんどの方が会場に残り、改めて展示を鑑賞し直す様子や、解説者に個別に質問や見解を話す様子がみられた。

5. アンケート結果

今回のギャラリートークの最後にアンケート（図6-1）を実施した。以下にその結果を示す。全4回分で、学年・年齢については、図2（p.2）で示している。

6. 現場からの気づきと考察

九州大学総合研究博物館では、これまでアウトリーチ活動を促進し、博物館との新たな関わりや双方向性を創出するためのワークショップなどを数多く行ってきた（平井・三島2010、三島など2010、三島など2011）。それらをふまえフジイギャラリーも、ただ「モノをならべて見せる」だけの場所でなく、「来館者の触発を促し、その創造性を育む「発想する場」を共に創ること」を目指しており、さまざまな価値をうみだし、それらを体感・共有しながら次のアウトプットへつなげていくことが期待されている。本項では、そのような先行研究やフジイギャラリーの機能などの視点から、今回の実践をふりかえる。

6-1. 参加者間の相互作用と場の雰囲気づくりの重要性

どの実施回もギャラリートーク終盤のまとめ部分において、全体をとおした質問を受け付けた際には、多数の挙手があり、終了後も会場に残って個別に質問をしたり、改めて展示を見直したりする参加者の様子が見受けられた。このことは、「学びたい」という参加者の意欲を触発するギャラリートークになったことを示唆している。

今回このような参加者の様子がみられた要因としてあげられるのが、“キーパーソン”の存在である。合計で4回のギャラリートークを開催したなかで、各回に1人は積極的に質問や発言をするキーパーソンが存在していた。そのような人をきっかけとして、活発な質問や発話が生じていた。

今回のギャラリートークはいずれも、自由に発言が許される和やかな空気感ではあった。しかしトークの途中で質問するには、解説を遮って挙手をするなどの動きが必要であり、大勢の前で声を上げて質問することに抵抗を感じている様子の方も見受けられた。一般的にもこのような場では、「質問したいが恥ずかしい」「詳しい話は聞きたいが、気の利いた質問が思い浮かばない」という人もいると考えられる。

今回のように、キーパーソンにより活発な質問が誘導されることは、そのような消極的な人にとっても他者の質問から気づきを得ることにつながったと推察される。今回は、キーパーソンとなる積極的な参加者が、双方向性や個々の気づきを促す役割を担ってくれていたといえる。

そのようなキーパーソンのあり方からは、立ち会うスタッフが会場の様子をみながら声掛けしたりあえて質問してみたりすることで、参加者が質問しやすい流れに誘導できる可能性を示唆している。解説者も、参加者の質問を引き出すような投げかけや、解説の間にしばしば質問しやすいような「間」をとるなどの改善が必要である。

以上今回のギャラリートークの実践をとおして、解説者とスタッフ双方が会場の雰囲気づくりに配慮した立ち回りをより意識する必要があることを、再認識することができた。

6-2. アンケートから得た知見

アンケートの回答によると、今回の参加者のほとんどが元寇防塁や歴史に多少の事前知識があり、中には、子供に教えるために解説を聞きにきたという回答があった



図5. 会場の様子（2023年5月13日，吉田撮影）。

a: ギャラリー1での導入，b: 蒙古兜を下から見上げて観察することを伝えた後，しゃがんで観察する参加者，c: 蒙古襲来絵詞を熱心に鑑賞している，d: 博多湾沿岸の防塁の地図は壁面に投影したものを利用した，e: 防塁の石積みについてはパネルの図を利用して解説，f: 「Unreal Engine」の操作を実演

（図6－3，下線部）。今後のギャラリートークは，年齢や事前知識のレベルにより解説内容を段階的に分けて実施するやり方もあるだろう。

「展示をするだけでは知り得ない話も聞くことができた」という回答からは，まさにパネルを読むだけでは伝

えきれないことへの理解も深まったことを示唆しており，ギャラリートークの重要性を再認識することができた。アンケートには「もっと話を聞きたい」「市民講座でも行ってほしい」などの声も多かったことから（図6－6，下線部），本ギャラリートークが市民向けの教育普及



ギャラリートーク『発掘担当者とみる元寇防塁展』 アンケート

* 学年・年齢を教えてください。

- ☐就学前()歳 ☐小学生()年生 ☐中学生()年生
☐高校生()年生 ☐専門学校・大学生・大学院生
☐10代・20代(社会人) ☐30代 ☐40代 ☐50代 ☐60代 ☐70歳以上

* 今回のギャラリートークを何でお知りになりましたか。(複数選択可)

- ☐フジイギャラリーHP ☐総合研究博物館HP ☐九大HP
☐総合研究博物館SNS ☐九大SNS ☐その他WEBサイト・SNS
☐新聞 ☐チラシ ☐県や市町村の広報誌 ☐友人・知人から
☐その他()

* ギャラリートークに参加しようと思った理由を教えてください。

* ギャラリートークについて、あなたの評価を教えてください。

- 1 2 3 4 5
不満 やや不満 どちらともいえない やや満足 満足

* 本展示「元寇防塁研究と九州大学」への感想

* ギャラリートークを通して得た気づき・感想など

* 今後フジイギャラリーに期待することなど

ありがとうございました

図6-1. アンケート

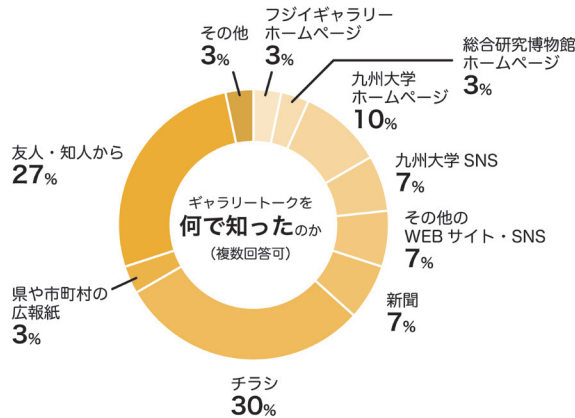


図6-2. アンケート集計結果：ギャラリートークを知ったきっかけ。

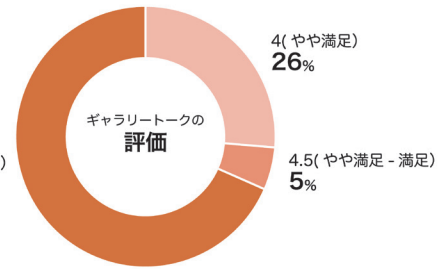


図6-4. アンケート集計結果：ギャラリートークの満足度。5と4の間に○をつけた回答については4.5として集計している。

＊ ギャラリートークに参加しようと思った理由を教えてください。

- ・歴史を学びたいと思ったため。
- ・元寇の福岡への影響を知りたくて
- ・元寇について知識を深めたい
- ・元寇について興味があった
- ・元寇の実態を知りたい。中山平次郎は鴻臚館の位置を発見したと聞いている
- ・元寇に興味があったから
- ・福岡に移住してから、防塁に関心を持っていたため
- ・元寇についての詳しいお話しをお聴きしたいと思ったため
- ・地元の史跡の元寇に興味をもっていたので
- ・貴重なお話をうかがえる良い機会だと思う。
- ・元寇に興味があったから
- ・興味があったから。
- ・西区歴史よかと案内人としてボランティアで一般の方々や小学生のFWなど姪浜から生の松辺りまでの歴史案内をしております。説明するにあたり最新の研究や発掘調査の過程などが判れば自身としても、細かな説明が出来るのではないかと思考しております。
- ・山城学講に参加しているから
- ・元寇防塁の事を調査しているから。
- ・歴史ボランティアガイドの会に参加しているので元寇防塁に興味があった。
- ・元寇750年記念事業をやる参考として
- ・中世史を専攻していたこと、業務で蒙古襲来を取り扱うことから、勉強しようと思いました。大学の方がどのように説明なさるか興味がありました
- ・大学・大学院時代に日本中世史を先行しており、蒙古襲来についても実際に防塁史跡を訪れたり専門書を読むなど興味関心を持っておりました。そのため、この度のギャラリートーク開催を知って是非九州大学と防塁研究の事蹟を詳しく知りたいと思い参加した次第です。
- ・箱崎キャンパスに通っていたので、発掘に興味があったため。調査状況を知りたかった。
- ・箱崎キャンパスでの発掘調査の説明会に参加しましたが、その後の研究成果について勉強したい
- ・箱崎キャンパスの発掘状況を知りたい
- ・祖原公園、鳥飼の近くに住んでいるので。元寇に由のある地だと知り興味を持ちました。
- ・箱崎キャンパスの発掘にしばらく関わったので、内容をきいてみたいと思ったので。
- ・元寇をあまり知らなかったの。(地元にあるのに)
- ・友人に誘われて
- ・研修

図6-3. ギャラリートークに参加しようと思った理由。

＊ 本展示「元寇防塁研究と九州大学」への感想

- ・戦前からの元寇防塁において、九州大学がその最前線を担ってきたことがよく分かったとともに、箱崎キャンパス跡地で発掘された防塁が他地区のそれと構造が大いに異なっているということ等を学ぶことができ、とても有意義であった。
- ・元寇防塁とは蒙古襲来のために突貫的に作られたものくらいの認識しかなかったのですが、半年であのクオリティーで石積みされたという事は当時の技術の高さに驚きました。割りあてられた大名により防塁の形態がかなり違うのはその大名の持ちえた技術、財布の違いもあるのでしょうか。
- ・長い間の研究の成果をていねいに説明されており、とても興味深かった。
- ・防塁研究の進展の全体像が分かった。
- ・九州大学に縁のある研究の発表でとてもあたたかなものを感じました。
- ・いろいろな研究をされているのが分かった。
- ・更に地域の人に知ってもらいたい研究だと思った
- ・今後も研究期待してます
- ・第一回令和太宰府アカデミーで、助手だった鏡山先生のその後の大活躍がわかった。まだわからないことがたくさんあるのは楽しいことですね。今津地区防塁の柱、サイズ感がわかっていいですね。
- ・具体的に防塁がどういう風に作られたか、だけでなく、その研究の歴史や背景、九大の研究者のことも含めて、とても興味深い内容でした。
- ・兜のお話はインパクトがありました!! 残念な結果でしたね。石積みがこんなに沢山見れる形であるとは知りませんでした。
- ・絵詞の巻物に出てくる人物の顔がやはり江戸時代の人相で笑ってしまいました。
- ・今後も色々元寇についてご教示願いたい! 遺跡等を「知る」「守る」「活性化に活用」を目的に取り進めている
- ・箱崎地区の防塁が他地区と異なっているという結果が知れた。今後も保存されるということで安心した。
- ・語りがお上手でわかり易かったです。SDで再現した、ロボットがおもしろかった!! (臨場感を味わえる)
- ・ギャラリートークの内容が良かった!
- ・あまり知られていないものがたくさんありました
- ・知らないことが多く勉強になった
- ・大変わかりやすく質問にも丁寧にお答えいただきありがとうございました。
- ・先生のお話がわかりやすく大変よかった。
- ・説明がわかりやすい
- ・聞き取りやすく、素人でも理解しやすく想像をかりたてられた
- ・その後の研究成果も含めよくまとまっていると思いました。
- ・コンパクトにまとめられていると思いました。
- ・長々としっかり説明下さって感激しました
- ・九大と防塁研究の関わり、箱崎キャンパスでの調査成果など興味深かったです。できれば、調査地点をずで示していただけるとわかりやすかったように思います。
- ・もう少し発掘された物や、発掘時の写真等が展示されてたらいいなと思いました
- ・展示物が少ないので、もう少し多くしても良いのでは? 子供向けに講演もしてほしいです。(教科書にのっているのも、興味があると思います)
- ・実物大の模型の展示があれば良かった

図6-5. 参加者による、本展示「元寇防塁研究と九州大学」への感想。太字は今回のワークショップの総括にあたり、筆者らが特に注目したコメントである。

＊ ギャラリートークを通して得た気づき・感想など

- ・活字を追うだけではよくわからないことも、丁寧な説明のおかげで、しっかりわかり、有意義な時間でした。どうもありがとうございました!!!
- ・パネルやキャプションだけでは理解しづらいことが、よく分かりました。
- ・資料や展示物の説明を近くで聞くことができ、わかりやすくてよかったです
- ・展示を見るだけでは知りえないお話を聴くことができ、大変興味深かったです。箱崎サテライトから出土している訳ですから、是非現役九大生にも興味を持っていただきたいですね。
- ・場所によって防塁の造りが違うという事で、その具体的な違いが知れて感謝です。
- ・学際的研究の重要性がよくわかった。
- ・元寇、防塁を勉強中だったので整調が出来た。
- ・防塁の研究がずっと行われているということがわかった
- ・元寇防塁研究の最新成果がよくわかりました。今後の研究の進展を期待しています。
- ・参加者の顔をみながらの説明や、質問したりされたりと…とても聞きやすかったです。社会の先生がこんなに楽しい先生だったらよかったな…
- ・実際に発掘に携わった先生の話聞いてとても良かったです。今後も新しい発表などがありましたらぜひ聞きに行きたいです。
- ・実際に調査をしたかたのおはなしは、やはり楽しいし、今後の研究も楽しみです
- ・以前より元寇に関して興味があったが、今回の話を聞いて、のちのちの日本に大きな影響を与えたことだとわかった。考古学のおもしろさがわかった。
- ・**石塁の延長の話など、事件以降というのはあまり聞かないものなので、そこを聞いてよかった。**
- ・箱崎キャンパスの修理の石積みがよく理解できました。
- ・3D技術などの活用がとてもおもしろい。
- ・3Dモデルで感覚的に理解しやすくなる取組が良かった。
- ・また興味あるテーマの際は訪れたい
- ・場所によって防塁のつくりが違うこと。
- ・**まだ解明されていないことがたくさんあること**
- ・元寇のカブト初めて見ましたが本物じゃなく残念
- ・市民講座などでもしてほしい
- ・もっと多く聞きたかったです。
- ・文献や遺物がすきなので、もっと見たいです。
- ・知名度の割に研究が進んでいない分野という風を感じた。
- ・明るい素晴らしい建物

図6-6. 参加者からの「ギャラリートークを通して得た気づき・感想」。太字は今回のワークショップの総括にあたり、筆者らが特に注目したコメントである。

＊ 今後フジイギャラリーに期待することなど

- ・元寇防塁は興味がある人も多いと思うので、今後も続けてあったら良いと思います。
- ・元寇防塁の更なる研究の深化を期待する。
- ・校内で発掘された資料等の展示・ギャラリートーク
- ・福岡、博多の歴史展示、九大の考古研究成果
- ・伊都キャンパス内の発掘成果も順次展示してほしいと思います。
- ・伊都キャンパスの発掘品に関するもの。
- ・箱崎キャンパスの古い什器をもっと見たいです。博物館にある蝶が綺麗ななので、ここでも見たいです。
- ・九大博物館が保有する数々のお宝をこちらで展示され、九大生に見てもらいたいですね。
- ・またギャラリートークなどを行ってください
- ・市民が興味をもてる展示企画
- ・他の研究されているものも展示していただきたい
- ・いろいろな企画を今後開いていただきたい。藤井様に感謝です。
- ・興味あるテーマの時に、また参加してみたい。
- ・いろんなことをまたわかりやすく開催していただけたらいいです
- ・去年の虫の研究の展示もすごくよかったですが、よい内容なのにあまり人に知られてない気がします。そのあたりが少し改善されたらな…と思いました。又の展示会、楽しみにしています！
- ・フジイギャラリーに初めて来ました。学内案内板にギャラリーが示されていなかったの、少々心配になりました。イベントの時だけでも、大きめの表示があると参加する方としてはうれしいです
- ・展示数を増やして下さい
- ・駐車場があるといいですね

図6－7. 参加者からの「今後フジイギャラリーに期待することなど」。

活動として実りあるイベントであったといえ、また、今後のリピーター獲得への可能性が伺えた。

6－3. 認知度向上の必要性とそれにむけた方策の可能性

参加者の会話から、初めて来たという方が多く、フジイギャラリーの存在がまだあまり知られていないことが、改めて明らかになった。

フジイギャラリーが所在する福岡市西区元岡地区では近年、本学伊都キャンパスに隣接する立地を活かした都市開発が進み、蔦屋書店をはじめとする商業施設や銀行などが新設され²、生活都市としての環境が整いつつある。今後人の流れが多くなる見込みがあることから、当ギャラリーにもその流れを引き込みたいと考える。

それにむけた方策として、以下のようなことが考えられる：

- ・今回の「福岡ミュージアムウィーク」のような連携イベントへの参加のほか、商業施設への出張展示や、近隣で開催されるイベントへの連動企画の実施
- ・ホームページやSNSでの広報・発信に加え、周辺施設でのチラシ配架場所の獲得と増設

フジイギャラリーは、伊都キャンパスで学内外の人が自由に休憩や見学ができる施設の一つとして位置付けられている。学外者に近隣施設同様行き先として選択してもらうためには、以下のようなターゲットを定めた企画が有効かもしれない：

- ・夏季学休期間中には、子供が対象となるような企画（例えば津守2023）
- ・オープンキャンパスや入学式などの学内行事のさいには、保護者などの大人向けの企画

このような企画では特にターゲットに即した内容や難易度でギャラリートークを組み込むことが有効であろう。

7. おわりに

今回のギャラリートークは、最初に述べたように、フジイギャラリーの周知を兼ね、来場者が身近にある元寇防塁についての理解をより深め、かつパネル文字だけでは伝えられない発掘現場の臨場感を伝えることを目的として企画したものだった。元寇防塁について調査してい

る人、福岡に移住してから防塁に興味を持った人など、参加者の動機はさまざまであったが、6-2で記したとおり、このギャラリートークは、人々の探究心を刺激し、参加者自らが考えたり疑問を抱いたりすることを促すことに成功したといえるだろう。結果として、パネル解説だけでは語りきれない歴史研究の魅力を感じてもらい助となったと思われる。今後もフジイギャラリーにおいて、ギャラリートークを積極的に行っていきたいと考えている。

学内教職員や学生にとってフジイギャラリーは、学外の一般の方よりももっと身近な施設であってよいはずだが、新型コロナウイルス感染症対策のための規制が概ね撤廃された2023年の1年間における来場者総数は学外者を含めて4,446人ほどである。伊都キャンパス教職員・学生の総数は26,608人³であり、学外来場者も多かったため、学内の教職員・学生の利用はあまり進んでいないとも考えられる。今回のようなギャラリートークを職員・学生向けに開催するなどして来場機会を増やせば、フジイギャラリーが目指している居心地の良い空間への認知も向上することが期待できる。リピーターの獲得と、リピーターからの口コミでの認知度の向上にもあわせて尽力し、展示・催事のみならず、休憩や学習スペースとしての活用も増やしたい。

謝辞

本稿執筆にあたりまして、日頃よりフジイギャラリーの展示設営に協力頂いている有限会社ケイ・ネットワーク様、博物館の皆さま、本イベントへ参加くださいました多くの皆さまに深く感謝いたします。

注

1 「国際博物館の日」（5月18日）にあわせ実施しており、今

年で14回目の開催となるイベント。5月13日（土）から5月21日（日）まで実施された。

2 「九大新町研究開発次世代拠点」福岡市ウェブサイト <https://www.city.fukuoka.lg.jp/keizai/sangakurenkei/business/motooka.html> 参照。2024.1.20閲覧。

3 「九州大学大学概要 2023年度（令和5年度）」九州大学ウェブサイト https://www.kyushu-u.ac.jp/f/55518/kyudai_gaiyou_2023_P30_35.pdf 参照。2024.1.24閲覧。

参考文献

- 小笠原喜康・並木美砂子・矢島國雄・2012. 博物館教育論 新しい博物館教育を描き出す、株式会社ぎょうせい。
- 黒沢浩. 2015, 博物館教育論, 講談社。
- 津守玲, 2023. 実践報告：観察眼を養うワークショップ「動物骨をスケッチしよう!」, 九州大学総合研究博物館研究報告 20, 23-30, 九州大学総合研究博物館。
- 平井康之・三島美佐子, 2010. 九州大学総合研究博物館常設展示室におけるインクルーシブデザイン・ワークショップ, 九州大学総合研究博物館研究報告 8, 67-74, 九州大学総合研究博物館。
- 福永将大, 2022a. 箱崎砂州先端部におけるモンゴル襲来前後の土地利用史, 箱崎キャンパス地区 元寇防塁 調査総括報告書111-127, 九州大学埋蔵文化財調査室
- 福永将大, 2022b. V 九州大学箱崎キャンパス地区における元寇防塁研究とその展開, 箱崎キャンパス地区 元寇防塁 調査総括報告書180-192, 九州大学埋蔵文化財調査室
- 三島美佐子・坂倉真衣・田中あかり・松隈明彦・岩永省三, 2011. 実践報告：九大博物館のホンモノ標本でチャレンジ!——見よう・描こう・比べよう!——, 九州大学総合研究博物館研究報告 9, 69-76, 九州大学総合研究博物館。
- 三島美佐子・平井康之・清水麻記・中西哲也・丸山宗利・南博文, 2010. 九州大学における今後の「アウトリーチ」のあり方, 九州大学総合研究博物館研究報告 8, 43-48, 九州大学総合研究博物館。

Received Dec. 29, 2023; accepted Jan. 25, 2024

Practical Report: The Research on the Genko Borui by Kyushu University “Gallery Talk — Exhibition of the Genko Borui with the Excavator”

Akiyo YOSHIDA, Masahiro FUKUNAGA, Shiori YONEMOTO

The Kyushu University Museum
The Fujii Gallery, Motooka 744, Nishi-ku, Fukuoka, 819-0395 Japan

“The Research on the Genko Borui by Kyushu University” was held as a special exhibition in the spring of 2023 at the Fujii gallery in Ito Campus of Kyushu university. We, the staff of the Kyushu University Museum, organized a “Gallery Talk—Exhibition of the Genko Borui with an excavator”. The purpose of this event was to provide participants with an opportunity to understand more about Genko Borui. We communicated interactively with participants in addition to providing explanations of the exhibits as we walked around the exhibition. In this report, we provide an overview of the gallery talk and the issues that became clear in the course of the talk.

Key words: gallery talk, Genko Borui, Fujii Gallery, Kyushu University Museum